

2017年6月25日川越教会

## 私たち自身が、献げもの

丸山 勉

[聖書] ローマの信徒への手紙 15章 22節～33節

こういうわけで、あなたがたのところは何度も行こうと思いつながら、妨げられてきました。しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです。しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります。それで、わたしはこのことを済ませてから、つまり、募金の成果を確実に手渡した後、あなたがたのところを経てイスパニアに行きます。そのときには、キリストの祝福をあふれるほど持って、あなたがたのところに行くことになると思っています。

兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、“霊”が与えてくださる愛によってお願いいたします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように、こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン。

[序]

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ 18:20)。今ここに、私たちの交わりの真ん中に復活の主がおられます。その主からの語りかけをご一緒に聴きたいと思います。

今日は神学校週間ということで、そのこととの関わりでこのローマの信徒への手紙をご一緒に聴くことが出来ることは恵みだと思えました。何週か前にご一緒に味わった 12:1 は礼拝の度毎に思い起こす必要がある御言葉だと思えます。「兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」。

「あなたがキリストを分かたら、分かったその分、キリストに捧げなさい」とある方がおっしゃいました。そうですね、献身というのは、自分の頑張りで出来ることでは有りません。ましてや義務でもありません。これはパウロが言う様に「憐れみに根ざす勧め」です。神様の恵みが、私たちの心に働きかけて下さって、主イエス・キリスト、このお方こそ私の人生の主だ、このお方に私は自らを献げて生きていきたい、という思いが与えられることです。そしてそれはお金とか心のありようと言うよりも「自分の体を」です。つまり、体が形づくる全生活をとんでもいいように思えます。私たちは既に主のものなので、私たちが何をしても、どこにいようと、私たちの 24 時間は主と切り離すことが出来ない生活です。主イエスも言われました。「わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている」と(ヨハネ 15:4)。

## [1] 主導権はイエス・キリスト

パウロはまさしくそのキリストの恵みに生かされた人でした。本当にアグレッシヴに働きました。キリストに動かされた人生と言ってもよいでしょう。しかし彼は自らを誇ることは致しません。今日のローマ書 15 章の箇所、その直前の 17 節以下をご覧ください。「そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないためです」。

この中で何度も「キリスト・イエスによって」とか「キリストが」という言葉が出てきます。私パウロが、ではないのです。ここが信仰の歩みのポイントですよね。主導権はどこまでも神様であり、またイエス・キリストだということです。パウロの自らを献げて生きる「献身」の人生、それは決して、力こぶを作ってやせ馬にムチを打つような悲壮なものだったのではなく、むしろ逆なのではないでしょうか。「献身」とは、導いてくれる存在があるから、献身なのです。その導きの手に引かれていく「自由」な、ある意味、「楽しい」生き方です。

## [2] 歩き続けるパウロ

それは今日の 15:22 節以下で、もっと具体的になっていると思います。「こういうわけで、あなたがたのところへ何度も行こうと思いつつ、妨げられてきました。しかし今は、もうこの地方に働く場所がなく、その上、何年も前からあなたがたのところに行きたいと切望していたので、イスパニアに行くとき、訪ねたいと思います。途中であなたがたに会い、まず、しばらくの間でも、あなたがたと共にいる喜びを味わってから、イスパニアへ向けて送り出してもらいたいのです。しかし今は、聖なる者たちに仕えるためにエルサレムへ行きます。マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです…。もう少し続きますが、私は今回読んで気付いたのですが、ここでパウロは、何度も同じ言葉を記しています。それは「行く」という言葉です。＜あなたがたの所、つまりローマに出来た教会に行きたいと何度も思っている。イスパニアに向かう際に行けたら良いと思っている。でもその前にエルサレムの教会に行きたいのだ。ギリシアやコリントなどの教会でささげられた信徒の献金を持って行って励ましたいのだ＞と。当時エルサレム教会は、民族主義が台頭して迫害を受けていました。また飢饉も起こって大変苦闘していたようです。パウロはこのユダヤ人たちの教会のことがいつも心にあったのです。異邦人の教会とエルサレムの教会が互いに支え合うこと、それがどんなにこれからの時代に大事なことか。献金は、その心の現われ、祈りでもあったわけです。

このようなどころを読んでいきますと私は、パウロという人は本当にどこまで＜前を向いている人＞なのだろう！と思ってしまう。人は偉くなって、また年令を重ねてくると、これまでの自分の実績や成果ばかりを抱きしめたり、それを誇ったり支えにしりすることが少なくないようにも思うのですが、パウロという人の生き方にはそれを感じませんね。彼の心は立ち止まっていません。いつも歩いています、未来を見えています。アイ・ウィル・ゴーですね。私は行きたいのだ、あなたがたローマの教会に。エルサレムの教会に。そして更にはまだ福音が行きわたっていないイスパニアにも！

### [3]冒険と方向

少し話がそれてしまうかもしれませんが、私自身がキリスト者として生きる上で、いつも、事ある毎に思い起こす文章があります。正確に言えば、ある講演の記録の書物からの文章なのですが、森有正という人の言葉です。森有正先生は、日本を代表するキリスト者の哲学者です。フランス渡ってパリ大学の教授もされましたが、また長い間国際キリスト教大学(ICU)の教授もされました。その森先生が1976年に召されるのですけれども、その4年前にICUの学生たちの前で、多分チャペルでお話されたものです。講演名は『冒険と方向』というものです。私は今回準備をしていて、パウロの生き方に思いを馳せ、またそのことが、私たち自身の信仰の歩みのチャレンジであることを思わされるのですが、その時、この森有正の言葉を思い起したのです。

森有正は、**信仰というのは「冒険」だと言うのです。でもそれは何か勇ましいセンセーショナルなものとは違う、と言います。むしろ逆だと言うのです。**少し引用しながら紹介します。

「冒険という言葉に対して、意味が反対の言葉があるのです。それは**同化**です。まず、自分というものがある。その自分の周りや内外に起こってくるものを、自分の欲望、或いは自分の判断に適したものだけを取り、あとは捨てる。そういうのを私は一種の同化作用的な人生だと感じております。これは自分に都合の良いものだけを学ぶ、自分の目標を達するのに都合の良いものだけを学んでいく。これは能率的でもあり、試験の成績も良くなるでしょう」。更に続けます。「自分の主張を通すことには非常に頑強ですから大体において目的を達する。地位が高くなり、権力も強くなる。けれども、その内心を見つめてみますと、学生時代からそれほど変わらない。自分に関することだけ利巧になり、上手になり、上手くなっていくけれども、その人間全体の質というもの、全体の豊かさというものは少しも出来ていない。それは、私の考えによれば、すべてを自分に同化させるという生活を送りまして、人生が冒険である、ということを忘れていているからであります」。

それでは、人生が冒険とはどういうことなのか？森有正は、**冒険とは「やむなく出会うものだ」と言うのです。**自分が何か冒険的なことを志すことではないと。それは創世記のあのアブラハムの歩みの様なものと言うのですね。アブラハムは決して野心的な生き方のような生活ではなく、普通の日常の中で神様の御声を聞きました。それが彼の信仰の旅立ち、冒険の発端だったのだと言います。「アブラムよ、あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。あなたを大いなる国民とし、あなたは祝福の基となる」(創世記 12:1~2)と声をかけられました。森有正は言います。「これは**実に大きな変化**です。父親にただ従って出発してきたところが、とんでもないことになってしまう。もう父親ではなく、**神様自身が出てきた。この時から神様ご自身が父親に代わって口をきかれるようになる。彼は直接に神様の前に立つようになる。ある場所に定住して豊かな生活をしようと言う望みは、神の祝福を求める歩みに変わった**」。こう森先生は語っています。

人は神様からの呼びかけを聴くときに、「冒険」へと誘われるのですね。森先生はさらに続けます。「(アブラハムのその後の波乱万丈な人生を思い見ながら)アブラハムの長い生涯はこのような波乱に富んだ冒険に満ちている。ところがその冒険というのは全て、彼が歩みの中で出会ったものばかりで、彼が好んで求めたものは何一つない。みんな外から来たのだ。そして彼は自分の中にあるものによってその冒険を乗り越えていった。彼を乗り越えさせたものと**言えば、それはアブラハムの中にはなくて、彼に約束を与え、その成就の方角へと導いた神様の中にあつたのです**」。つまり、冒険を与えたのも神様であるならば、またその冒険を支えて最後まで持ち運んで下さるのも神様なのだということです。

どうでしょうか？私たちは今日この日にここで一緒に礼拝を捧げています。例えば今から10年前

にこのように川越教会で礼拝を捧げる生活をしていることを思い描いていた人はあるでしょうか？いらっしゃるかもしれませんね。(私自身は今ここにこうして立っていることは予想出来なかったことで本当に驚きです)。では20年前30年前は？イエス様を救い主と告白することすら全く予想していなかったかもしれませんね。でも、振り返ってみると、日常生活の中で、**自分のプランではなく、もうそれは神様の導きだった**としか思えないような出来事に出会って、或いは**出会い**があつて、主を告白する日があり、今この日、と一緒に神様を讃美しているのではないのでしょうか。私たちは、たった一度きりの人生を、神様の声に聴き、その方に信頼して生きる人生という「冒険」を、神様から与えられているのです。アブラハムのように。でもそれは、<神の祝福の基>とされていく幸いな冒険なのだと思います。

#### [4]わたしたちは神のもの。神に自らを返す。

この森有正は、他の講演の中でこんな言葉を残しています。Ⅱコリントの御言葉に触れながら、「私どもはみな土の器で、どんなこの世で優れた人もどんなに劣った人も、すべて土の器で神の前に同等である。そして、自分は神に造られた土の器である、土から造られ土に戻るものであることが分かる時、実にこの人生というものが本当の意味で透明になり、また単純になり、しかし限りなく深くなる」。私は自分の存在を、「土の器」だとそのように捉える時に「この人生というものが本当の意味で透明になり、また単純になり、しかし限りなく深くなる」という言葉がとても好きです。本当でしょうか？私たちの人生が透明になる、単純になる。こんなに濁り切ったような私たちの人生なのに、透明と言えるのでしょうか？

私は、先ほどのローマの信徒への手紙 15 章の言葉を思い起しました。

15:15～17「記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思い切って書きました。それは、わたしが神から恵みをいただいて、異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。そしてそれは、異邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、**神に喜ばれる供え物**となるためにほかなりません」。17 節に「神に喜ばれる供え物」とあります。クリスチャンは、**神への捧げ物、献納物**となると言うのです。パウロのあの言葉と響き合っています。「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして**献げなさい**」と。そう、**私たちは神のものだから、神に返るのです！**今この地上を歩んでいるのも、ある見方からすれば、「**神の捧げ物**」としてこの世へと送り出されている存在だ、と言えるのではないのでしょうか？もし私自身が「神様の捧げ物」**と思えるのであれば、それこそ「この人生というものが本当の意味で透明になり、また単純になり、しかし限りなく深くなる」との言葉に、「アーメン！」**と言えるのではないのでしょうか。もとより、神様は私たちがどれほど罪にまみれた存在である事かをご存じです。大伝道者パウロだってそうでした。でも、神様は「この人を用いる」と思われたのなら、神様の責任において、どんな存在をも御業にお用いになるのです。パウロが、もし周りの人によるレッテルを気にしていたら前には進めなかったでしょう。彼は一体何だ！と。クリスチャンに対してあの悪行を重ねながらそれを忘れたかのように活動している。説明責任を果たせ！いや、まずは懲役刑だ！…きっと私もそう思ったと思います。けれども！神様のなさり方は私たちの想像を遥かに超えています。神様はこともあろうに、迫害者サウロを、神様のなさり方で、世界の伝道者パウロに造り変えたのです。それはパウロの話としますか？自分はとても変えられないと思いますか？そうではないと思います。私たちはとすると自分で自分にレッテルを張ってしまい、それを中々剥がすことが出来ません。あんなことをしてかした私はとても人の前に行けなとか、資格がないとか、どこかで**過去から自由にされていないことが私**

たち人間にはあるように思います。最近随分「忬度」とか「だれだれのご意向」などという言葉に耳にしますが、それは政治の世界だけではないですね。私たちは周りが気になってしょうがないのです。でも、ちょっと乱暴な言い方になりますが、信仰の世界は、周りの評価はどうでもいいのです。**私と神様、私とキリストの関係**です。他人からも、自分の拘りからも自由にされることです。アブラハムではありませんが、＜やむなく出会う＞ことに心を開く、それがどんなに理不尽に思えることでも、試練と思えることでも、受け止めていくことが出来るようにして頂けるのです！それが聖霊のお働きです。

使徒言行録 20:22 では、パウロはミレトスの港を出港する前に皆を集めてこう言いました。です。「今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。ただ、**投獄と苦難とがわたしを待ち受けている**ということだけは、聖霊がどこの町でもはっきり告げて下さっています。しかし、**自分の決められた道を走り通し、また、主イエスから頂いた神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません**」。—この**自由**です！彼は、後ろのものを忘れ、前に向かうのです。更にはイスパニア伝道が心にありました。結局はその途上で殉教を遂げてしまったようですが、彼はいつも前を向いていました。そして神を愛し、人を愛しました。教会の交わりがイエスの喜びで満ちていくことに全身全霊をかけました。**彼がそのように出来るのは他ではありません、神に赦されてるからです。キリストが彼の身代りとなって、そのすべての罪を背負って支払い切って下さったからです！私たち一人ひとりもそうです。あなたは私の愛する子だ、わたしに繋がっていればよい、と仰って下さっています。そうであれば、私たち、この地上に神様から派遣された存在として、その私自身を今度は神様にお捧げして生きて行きたいと思えます。「なぜならキリストの愛が私たちを駆り立てているからです」**(Ⅱコリント 5:15)。パウロと共に、溢れる感謝を持って前に進んで行きましょう！「献身」とは、職業のことではありません。生き方のことです。

### [祈り]

主イエス・キリストの父なる神様、御名を讃えます。

今週から神学校週間が始まりました。「伝道者を送り出して下さい」と祈ります。そしてそれは私たち自身にも響いて参ります。「あなた自身が、私の愛されているものとして、証し人として生きていきなさい。あなた自身の生活と命をわたしに捧げなさい」と。どうか、透明で、単純で、深い喜びに満ちた人生を私たちに味わわせて下さい。この主の愛の交わりの中に加わる方が増し加えられるよう祈り、労する者とさせて下さい。

今、様々な人生の試練の中に日々を過ごしておられるお一人びとりに、上からの力と慰めとを与え、あなたが共におられる確信をお与え下さい。

主よ、どうかこの世界と日本を憐れんで下さい。悲しい差別がなくなりますように。自分を愛するよう隣人を愛することが出来ますように。神様の恵みが全ての者にあることを信じ、私たちが置かれている場で、あなたの愛を映し出す者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。